



園だより

6月号

令和3年5月27日
駿河台大学第一幼稚園
園長 田所 恒子

環境を通して行う教育

入園・進級から約2ヶ月が経とうとしています。毎朝、門に立ち登園の様子を見てきました。一人ひとり新しい環境への適応の仕方や時間は異なりますが、日に日に緊張や不安が解け、安定した姿が子どもたちに見られます。笑顔で挨拶したり、大好きな担任を目指して保育室に向かったり、身支度を済ませて早々に好きな遊びを始めたりと、新しい生活の中で主体的に取り組む姿がたくさん見られるようになりました。

幼稚園教育は、環境を通して行う教育です。環境とは、子どもたちを取り巻く「人・もの・こと」を指します。子どもたちは、周囲の環境にかかわり、教師や友達とかかわりながら遊びや生活を楽しむ中で「主体的・対話的で深い学び」を得ることができます。その基盤には、安心・安定して生活することができる環境が必要になります。前述のように子どもたちの安定した姿が見られることから、幼稚園が子どもたちにとってそのような環境となっていることに嬉しくなります。

環境を通して行う教育の実践には、子どもたちの姿を読み取り、子どもの育ちを見通しながら「主体的・対話的で深い学び」につながる環境の構成を工夫しなくてはなりません。

初めてのクラス替えを体験した年中児には、新しい友達と一緒に遊びを楽しむきっかけが必要です。昨年同じクラスであった2人の子どもが製作コーナーから材料を持ってきて、ままごとコーナーでご馳走作りをして遊んでいました。昨年クラスが異なったAちゃんは、しばらく2人の楽しそうな様子を見ていましたが、「入れて」と一緒に遊び始めました。楽しそうな2人の姿が「やってみたい」という気持ちを高めたのでしょうか。2人を真似てご馳走を作ったり、おしゃべりをしたりと楽しそうです。しかし材料が必要になると離れた製作コーナーに行くため、その楽しさが途切れてしまう様子が見られました。その様子を見た教師は、ご馳走の材料になる素材が入ったワゴンをままごとコーナーの近くに持って行き、ものを動かして環境を変化させました。そのことによりおしゃべりやご馳走作りが途切れることなく3人はより一層楽しむことができ、環境の構成の工夫により友達関係や遊びが広がりました。

年長児は、憧れをもって見ていた先輩の遊びを「やってみよう！」とする姿が見られます。特に遊戯室で巧技台をサーキット状に組み立て遊ぶ子どもが多くなりました。そこで、巧技台やマットを子どもたちの力で取り出せるような環境を作りました。その結果、自由に遊び、繰り返し取り組める時間を保証する中で、自分たちで考え、友達と力を合わせて巧技台を運び、サーキットを組み立てて身体を動かすことを楽しんでいます。梯子の金具が緑色の蓋の穴に入っているかの確認をしっかりとしたり、マットを敷いたりして安全も考えて遊ぶことができるようになり、たくさんの力が育ってきました。

深い学びを得られるようためには環境がどうあったらよいか、今年度は園内研究のテーマを『進んで身体を動かすことを楽しむ幼児を育てる - 「やってみよう！」の気持ちがつながる環境の構成 - 』と設定して本園の教育の充実を図ってまいります。

なお、『令和2年度 園内研究のまとめ』を玄関に掲示しています。ぜひご覧ください。



今年も年長児の泥団子作りが始まりました。昨年の年長児をモデルに土と水の割合を試しながら楽しんでいきます。土、水だけでなく、モデルとなる人や十分な時間も“環境”です。



年少児は、「先生あのね」と“環境”である担任と一緒に遊び、受け入れてもらいながら安心・安定して園生活を過ごせるようになりました。



今年度から園庭履きと上靴を足の育ちに良い靴へと変更しました。“環境”としての効果を上げるため「ベリベリトントンギューツ、ピタ」と一斉活動で正しい履き方を指導します。



年長児は、巧技台を組み立てて遊ぶの場を作りながら、“環境”を自分たちで変化させながらたくさんのお話を学んでいます。